

[研究論文]

デンマークの伝承譚詩からゲーテの『ハンノキの王』への 発展過程の考察

—シューベルト《魔王》D328の総合理解に向けて—

A Study of the Development Process from Danish Folklore Ballad to Goethe's Poem *Erlkönig* —Towards a Synthetic Understanding of Schubert's Lied *Erlkönig* D328—

今野哲也

KONNO Tetsuya

〈抄 録〉

ゲーテの『ハンノキの王』は、ヘルダーの民謡思想の影響下に書かれたバラードである。『ハンノキの王』は、シューベルトの《魔王》D328の歌詞としても知られているが、その原型を辿ると、デンマークの伝承譚詩にまで遡る。この世の者ならぬ存在が、罪のない若者の命を奪うという筋書きこそ原型から一貫しているが、ゲーテは新たに、「中年男性による少年への誘惑」と「父親の無理解⇒親の子殺し」のモチーフを導入している。本研究の目的は、デンマークの伝承譚詩から『ハンノキの王』が成立してゆく過程を精査しながら、ゲーテの創作の意図を検証することにある。

子供の主張を無視し続けた馬上の父は、啓蒙思想の象徴とも捉え得るし、絶命する息子に、同性愛的な「ギリシアの愛」の対象として、古代ギリシアへの懐古趣味を見て取ることもできるかも知れない。これらの諸要因が総合的に咀嚼された結果、劇的效果をさらに強めるため、ゲーテは「少年愛のモチーフ」を導入したとする見解を述べ、本研究の結論とする。

キーワード：J.W.v.ゲーテ、J.G.v.ヘルダー、デンマークの伝承譚詩『妖精の一撃』、バラード『ハンノキの王』、歌曲《魔王》D328

Abstract

Johann Wolfgang von Goethe's poem *Erlkönig* is a ballad in which the words were composed under the influence of Johann Gottfried von Herder's folk song ideas. Goethe's poem *Erlkönig* is also known as the words of Franz Schubert's Lied *Erlkönig* D328, though more prototypes date back to a Danish folklore ballad. The plot in which a wicked existence takes the life of an innocent young person is consistent from the prototype. Goethe introduces, however, motifs such as "the tempting of boys by middle-aged men" and "a father's lack of understanding' approximately equaling 'infanticide by the father.'" The purpose of this study is to investigate the adaptation process of the Danish folklore ballad and *Erlkönig*, as well as to consider the meanings of Goethe's compositional aims.

The father on the horse in *Erlkönig* who kept ignoring his child's insistence can also be seen as a

symbol of the philosophy of the Enlightenment era. The boy who dies in *Erlkönig* is reminiscent of the youth in ancient Greek homosexual relationships. Based on these factors, this study concludes that to strengthen the dramatic effect, Goethe introduced the “motif of boy love.”

Keywords: Johann Wolfgang von Goethe, Johann Gottfried von Herder, Danish folklore ballad *Elverskud*, Ballad *Erlkönig*, Lied *Erlkönig* D328

0. 序

クラシック音楽の愛好者でなくても、F.シューベルト（Franz Schubert 1797–1828）の《魔王 *Erlkönig*》D328（1815）を知らぬ者はいないであろう。そのドラマティックな構成に、心を揺さぶられた経験を持つ者も少なくない筈だ。《魔王》の歌詞は、J.W.v.ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe 1749–1832）のバラード『ハンノキの王 *Erlkönig*』（1782）を基にしている。しかし、『ハンノキの王』をさらに掘り下げてゆくと、『妖精の一撃 *Elverskud*』というタイトルを持つ、デンマークの伝承譚詩にまで遡ることになる。その内容も、私たちが知る《魔王》とは、それなりにかけ離れたものになっている（後述）。つまり、『妖精の一撃』から『ハンノキの王』の間には、ある種の変容の過程が認められるということである。本質的な点のみを先取的に述べておくと、ゲーテは『ハンノキの王』に、「中年男性による少年への誘惑」という独自の設定を、新たに導入している。それでは、ゲーテはどのような意図を以て、この作品を組み上げるに至ったのであろうか。

そこで本研究では、デンマークの伝承譚詩『妖精の一撃』の考察も行いながら、ゲーテの『ハンノキの王』に込められた意味を検証してみたい。『妖精の一撃』から『ハンノキの王』への発展過程については幾つかの有効な先行研究があり、本研究もそれに負う部分が多い。しかし本研究の最終的な目的は、シューベルトの歌曲《魔王》を交えた総合的な理解にある。そのため、本稿での考察の上に、詳細な《魔王》の楽曲分析を展開してこそ、より深い作品理解に到達し得ると考えている。しかし紙面の都合もあり、今回はシューベルトの観点は敢えて捨象し、《魔王》の原型となるゲーテの『ハンノキの王』と、その成立過程に主要な論点を絞ることとする。本研究を以て、いずれ行われるであろう、音楽内容をも摺り合わせた考察の前段階としておく。なお本稿では、ゲーテの原詩 *Erlkönig* を『ハンノキの王』と呼び、歌曲のタイトル *Erlkönig* を、慣例に従い《魔王》と呼び、両者を区別しておく。

1. ゲーテと原詩『ハンノキの王』の考察

1.1 ゲーテと「疾風怒濤」（シュトゥルム・ウント・ドラング）

ゲーテは、ドイツ古典主義を代表する小説家、劇作家、詩人である。裕福で教養のある両親の許に生まれ、手厚い教育を受けた。そのため、学問や語学にも秀でていたが、若き日のゲーテにとって、主な関心事は芸術や文学であったようだ（それに恋愛も）。それでも父親の意向を汲み、1765年に入学したライプツィヒ大学では法律を専攻している。病気や失恋により、一旦、大学を退くも、1770年に再入学したストラスブールの大学では、5歳年上のドイツの批評家・思想家J.G.v.ヘルダー（Johann Gottfried von Herder 1744–1803）との運命的な出会いを果たしている。この出会いこそが、「疾風怒濤」（独：Sturm und Drang）の運動の基盤を用意してゆくことになるのである。

「疾風怒濤」は、ドイツ文学を中心とする芸術分野で起こった、激しい感情表現を目指す運動と定義される。その名称は、ドイツの作家F.M.v.クリンガー（Friedrich Maximilian von Klinger 1752–

1835)の同名の戯曲のタイトルに由来している。直訳すれば「嵐と衝動」となるが、一般には「疾風怒濤」の訳語が流布している。この運動は、当時の啓蒙主義のあり方に異を唱え、人間の自然な感情を重んじ、非合理主義の立場を重要視する姿勢に基づいていた。

大学卒業後のゲーテは、ヴァイマル公国に迎えられまでの数年間、弁護士を開業していたが、この時期の作品が、彼の「疾風怒濤」期の創作の頂点と言われる。とくに『若きウェルテルの悩み *Die Leiden des jungen Werthers*』(1774)により、若い読者から圧倒的な支持を得て、ゲーテは一躍、文壇の寵児に躍り出ることになる。

詩作においても、ギリシア神話を題材とした『ガニユメート *Ganymed*』(ca 1774)や、『プロメテウス *Prometheus*』(ca 1774)などを生み出している。ヘルダーの民謡思想(後述)に誘発されて書き始めたバラードには、『野ばら *Heidenröslein*』(発表は1771)、『すみれ *Das Veilchen*』(1773)、そして『トゥーレの王 *Der König in Thule*』(ca 1774)などがある。『さすらい人の嵐の歌 *Wanderers Sturmlied*』(ca 1772)も、ヘルダーの影響下に生み出された作品と言われている。

「疾風怒濤」は1770年に始まり、1780年頃まで続いたとされるが、ヴァイマル公国の宮廷に「就職」した直後の1776年には、ゲーテはその熱から解放されていったようだ。理解のある大公の下で、ゲーテはこの地で大臣となり、1782年には貴族の称号を与えられるほどの地位を得たことを考えれば、それも当然の成り行きと言えよう。

1.2 ヘルダーの『民謡集』とゲーテの『ハンノキの王』の連関

ヘルダーは、ドイツに生まれた批評家・思想家である。ケーニヒスベルク大学では神学を専攻し、I. カント(Immanuel Kant 1724-1804)らとも交流している。「疾風怒濤」の文学者たちの理想は、自然で自由な人間たり得ることにあつた。そのため彼らは、「民謡 […]こそ人間本来の、直接的で真実な感情表現の宝庫」(富重 2003: 84)と考えていた。

その中心にいたヘルダーは、各地に伝わる伝承・伝説を「より普遍的な『人間性の声』の証言集」(嶋田 2018: 765)と位置付け、『民謡集 *Volkslieder*¹⁾』(1778-1779)として具現化した。『民謡集』は2部構成で、第1部は全3巻(各巻に24編)、第2部も全3巻(各巻に30編)で構成される(合計162編)。ただしヘルダーにとって民謡は、たんなる翻訳に留まるものではなかった。実際、『民謡集』には大なり小なりデフォルメを加えたものや、ときには完全な創作までもが含まれている。

ヘルダーの『民謡集』第2部の第2巻には、『ハンノキの王の娘 *Erlkönigs Tochter*』というバラードが収録されている。ゲーテはそこに独自のアイデアを投入し、新たに『ハンノキの王』という作品を編み上げた。このバラードこそが、『魔王』の歌詞の原型である。ゲーテは、ヘルダーの影響から民謡の研究に勤しんだ。大山は、「この時期のゲーテの諸作品は、ヘルダーのかかげた文学理想に呼応して創作された直接の成果」(1990: 997)と述べているが、そうした作品の一つが、ゲーテの『ハンノキの王』である。ただし、もともと『ハンノキの王』は、1782に初演されたゲーテのオペレッタ『漁夫の娘 *Die Fisherin*』に挿入された、幾つかのバラードの中の一つであった²⁾。同年のうちに『ハンノキの王』は世に出る運びとなったが、本来的にこの作品は、独立した形を取っていなかった訳である。

『ハンノキの王』が書かれた1782年は、ゲーテがヴァイマル公国で貴族の称号を受けた年である点には留意しておきたい。つまり、『ハンノキの王』はヘルダーの影響下に書かれたことには間違いはないが、「疾風怒濤」の真っ只中の作品ではないということである。

1.3 ゲーテの『ハンノキの王』の詩節と内容

『ハンノキの王』は、8節各4行で構成される。ここではaabbの詩形、すなわち「対韻」(独:

Paarreim) が用いられている。たとえば、第1節第1行は “…durch Nacht und Wind?” (暗闇と風)、第2行は “…mit seinem Kind,” (彼の子供と) という脚韻の踏み方が見られる (下線は筆者による)。第1節と第8節は、語り手による状況説明である³⁾。そして第2～7節では、父親と子供のやり取りの言葉と、ハンノキの王による誘惑の言葉が展開される。

「バラード」(譚詩) という用語には、幾通りかの意味がある。たとえば、詩形や楽曲の名称もそこに含まれる。しかし『ハンノキの王』に関しては、抒情的・叙事的な短い詩と捉えるべきであろう。“Erle” (ハンノキ) + “König” (王) という奇妙な造語の意味も、日本語の歌曲のタイトルが意識的に《魔王》で定着してしまった理由も、以下の原詩の内容 (【詩1】) に鑑みれば理解されようが、そもそもこうした木のイメージは、一体どこから来たものなのだろうか。



【図1】『ハンノキの王』の構成 (①、②…は詩の節)

【詩1】『ハンノキの王 Erlkönig』の原詩と対訳 (拙訳)

※ [] 内は筆者の補足、原文行末の () 内は脚韻の区別。

Strophe 1 (第1節) 語り

- 1 Wer reitet so spät durch Nacht und Wind? (a)
こんな遅い時刻に暗闇と風の中で馬を走らせているのは誰か?
- 2 Es ist der Vater mit seinem Kind; (a)
それは子供を連れた父親だ
- 3 Er hat den Knaben wohl in dem Arm, (b)
彼はしっかりと男の子を腕に持って
- 4 Er faßt ihn sicher, er hält ihn warm. (b)
彼は危なくないように子供を包み込み、暖かさを保つようになっている

Strophe 2 (第2節) 父親→子供→父親

- 1 „Mein Sohn, was birgst du so bang dein Gesicht?“ (c)
父 「息子よ、お前は何にそんなに怯えて顔を隠しているのだ？」
- 2 „Siehst, Vater, du den Erlkönig nicht? (c)
子 「お父さん、ハンノキの王が見えないの？」
- 3 Den Erlenkönig mit Kron' und Schweif?“ (d)
子 冠を付けて尾を生やしたハンノキの王のことが？」
- 4 „Mein Sohn, es ist ein Nebelstreif.“ (d)
父 「息子よ、それはたなびく霧なのだよ」

Strophe 3 (第3節) ハンノキの王

- 1 „Du liebes Kind, komm, geh mit mir! (e)
[王] 「君、愛らしい坊や、おいで、私と一緒にいこう！」
- 2 Gar schöne Spiele spiel' ich mit dir; (e)
[王] とっても素晴らしい遊びを私は君とするのだ
- 3 Manch' bunte Blumen sind an dem Strand; (f)
[王] とてもたくさんの色とりどりの花々が浜辺にはあるんだよ
- 4 Meine Mutter hat manch' gülden Gewand.“ (f)
[王] 私のお母さんはね、金色の服をとってもたくさん持っているんだ」(f)

Strophe 4 (第4節) 子供→父親

- 1 „Mein Vater, mein Vater, und hörest du nicht, (c)
[子] 「お父さん、お父さん、それでも聞こえないの
- 2 Was Erlenkönig mir leise verspricht?“ (c)
[子] ハンノキの王が僕に何かを小声で約束 [しよう] するよ」
- 3 „Sei ruhig, bleibe ruhig, mein Kind; (a)
[父] 「落ち着くのだ、落ち着いたままでいなさい、息子よ
- 4 In dürrn Blättern säuselt der Wind.“ (a)
[父] 枯葉の中を風が音を立てて通り過ぎている [だけなのだから]」

Strophe 5 (第5節) ハンノキの王

- 1 „Willst, feiner Knabe, du mit mir gehn? (g)
[王] 「繊細な男の子よ、君は私と一緒にいきたいだろう？」
- 2 Meine Töchter sollen dich warten schön; (g)
[王] 私の娘たちが君を楽しく待っているんだ
- 3 Meine Töchter führen den nächtlichen Reihn (h)
[王] 私の娘たちは暗闇を案内するつもりでいるよ
- 4 Und wiegen und tanzen und singen dich ein.“ (h)
[王] そして揺り動かしたり、踊ったり、歌って君を寝かしつけるつもりでもいるんだ」

Strophe 6 (第6節) 子供→父親

- 1 „Mein Vater, mein Vater, und siehst du nicht dort (i)
[子] 「お父さん、お父さん、それでも見えないの、
- 2 Erlkönigs Töchter am düstern Ort?“ (i)
[子] あそこの薄暗いところにいるハンノキの王の娘たちが？」
- 3 „Mein Sohn, mein Sohn, ich seh' es genau: (j)
[父] 「息子よ、息子よ、もちろん私にだってはっきりと見えているさ
- 4 Es scheinen die alten Weiden so grau.“ (j)
[父] [だけど] あれは古い柳の木の枝がとっても陰気だからそう見えているのだ」

Strophe 7 (第7節) ハンノキの王→子供

- 1 „Ich liebe dich, mich reizt deine schöne Gestalt; (k)
[王] 「私は君のことが大好きだ、君の美しい姿が私をそそらせるんだ
- 2 Und bist du nicht willig, so brauch' ich Gewalt.“ (k)
[王] だからお前が従順にしてくれないのなら、私は暴力を使ってでも [連れてゆくぞ]
- 3 „Mein Vater, mein Vater, jetzt faßt er mich an! (l)
[子] 「お父さん、お父さん、いまあの方が僕を掴んだんだよ!
- 4 Erlkönig hat mir ein Leids getan!“ (l)
[子] ハンノキの王が僕に危害を加えたんだ!」

Strophe 8 (第8節) 語り

- 1 Dem Vater grauset's, er reitet geschwind, (a)
父親はぞっとして馬を風のように走らせる
- 2 Er hält in Armen das ächzende Kind, (a)
彼は呻き喘いでいる子供を腕に支えている
- 3 Erreicht den Hof mit Mühe und Not; (m)
苦勞困ばいして屋敷に着くと
- 4 In seinen Armen das Kind war tot. (m)
彼の腕の中で子供は死んでいた

三上の言説は、本研究に多くの示唆を与え得るものであるため、ここに幾つかの見解を紹介しておきたい。すなわち、①ハンノキの王は「同性愛の志向のある不気味な中年の男」(1983: 123)であり、中年男性とする根拠は、「年ごろの娘達がいる」(同前: 118)とする点。②昔の貴族は早くから馬術の訓練を行ったため、父に抱かれている子供は乗馬もできない幼児(8～9歳)と考えられる点(同前: 121-22)。そして、③子供は父の胸に顔をうずめながら怯えている状況から、ハンノキの王は後ろから迫って来るのではなく、むしろ「彼らの行く手に立ちはだかっている」(同前: 120-121)と解釈し得る点などである。

2. 『ハンノキの王』の原型の考察

2.1 デンマークの伝承譚詩『妖精の一撃』とヘルダーの『ハンノキの王の娘』

ゲーテの『ハンノキの王』には、延いてはヘルダーの『ハンノキの王の娘』には、さらなる原型がある。デンマークの伝承譚詩 *Elverskud* (作者不詳) である。作品の理解を深めるためにも、この伝承譚詩にも触れておく必要があるだろう。

デンマーク語の“elv”は「妖精」、 “skud”は「発砲」や「ひとけり」など意味する言葉である。この詩のクライマックスには「[[妖精王の]娘は[オールフ]卿の肩をうち その一撃は彼の心臓の奥底までこだました」(菅原 1976: 17, []内は筆者の補足)という表現が見られることから、『妖精の一撃』などの訳語を充てても良いかと思われる(菅原は『妖精の呪いの一撃』としている)。ただしヘルダーは、たんにドイツ語に翻訳するのではなく、自分なりにアレンジを加えた形で、このデンマークの譚詩を世に伝えている。このときタイトルも、ドイツ語で *Elfenkönig*⁴⁾ (『妖精たちの王』)に変更する予定だったようだ。しかしヘルダーは誤って(意図的という説も)、*Erlkönigs Tochter* (『ハ

ンノキの王の娘』) というタイトルを付けてしまい、それが慣例的な名称として定着してしまった経緯がある (嶋田 2018: 745、万足 1975: 95)。

2.2 「ハンノキ」とその象徴

『ハンノキの王の娘』が書かれた時点で、偶発的に (故意に?) “Erle” (ハンノキ・榛の木・赤楊、“Else” と) なるキーワードが発生するに至った。三上は「Goetheの想像力は、その『木』のイメージに助けられ、[...] 精霊の像をふくらませていったのです。それからというもの、ElfenとErlenは (日本の梅と鶯と同じように) ドイツ文学で一緒に使われる縁語になりました」(1983: 131) と述べている。後にこの作品を翻案することになるゲーテにとって、このヘルダーの誤訳は、作品のイメージをさらに増幅させる上で、むしろ歓迎すべきことだったようだ⁵⁾。

ハンノキは、カバノキ科の落葉高木である。それは直立型の幹で、ギザギザで楕円形の葉を持っている。ハンノキは、しばしば「死」の象徴としても用いられるが、その他にも、ギリシア神話の農耕神「クロノス」(Kronos)⁶⁾ との連関を指摘する言説もある (Vries 1984: 11)。クロノスは、父ウラノスを鎌で去勢したあげくに殺害し、さらには父の予言に怯えるあまり、自分の子供を飲み込むという、まさに「親の子殺し」の象徴とも言える強烈なキャラクターである。『ハンノキの王』の父は、命がけの子供の主張に一切、耳を貸すことがなかった。その意味において、直接的に自ら手にかけて訳ではないにしても、この父親は、ハンノキの王の行動をむしろ助長する存在ではなかったのか。こうした『ハンノキの王』の内容に鑑みると、親の子殺しの象徴とも言える「クロノス」のイメージが交差するのである。

2.3 ヘルダーの『ハンノキの王の娘』の詩節と内容

ヘルダーの翻案は、大筋ではデンマークの『妖精の一撃』に依拠するものだが、オリジナルの『妖精の一撃』では、より悲惨な結末が描かれている。ヘルダーの『ハンノキの王の娘』では、許嫁が、絶命したオールフ氏を発見する場面で終結している。しかし、原型の『妖精の一撃』では、悲しみに暮れる許嫁がオールフ氏の後を追ひ、さらにはオールフ氏の母親までもが亡骸となる場面までが描かれる。『妖精の一撃』は、オールフ氏の館に横たわる3人の遺体のフォーカスで終結するのである。

本来であれば、しっかりと両作品を検証すべきところではあるが、紙面の都合上、ここではヘルダーによる『ハンノキの王の娘』の対訳を示すに留める。『妖精の一撃』に関しては、『デンマーク文学作品集』(牧野不二雄監修、1976年、14-19頁)などを参照して頂きたい。

【詩2】『ハンノキの王の娘 Erlkönigs Tochter』の原詩と対訳 (拙訳)

※ [] 内は筆者の補足、原文行末の () 内は脚韻の区別。原文は古語のままとした。

Strophe 1 (第1節) 語り

1 Herr Oluf reitet spät und weit, (a)

オールフ氏は夜遅くに遠くへと馬を走らせる

2 Zu bieten auf seine Hochzeitsleut'; (a)

彼の結婚式の客たちに [明日の式のことを] 伝えるために

Strophe 2 (第2節) 語り

1 Da tanzen die Elfen auf grünem Land', (b)

このとき緑の丘の上で妖精たちが踊っていた

2 Erlkönigs Tochter reicht ihm die Hand. (b)

ハンノキの王の娘は彼に手を伸ばす

Strophe 3 (第3節) ハンノキの王の娘

1 »Willkommen, Herr Oluf! Was eilst von hier? (c)

「ようこそ、オールフさま！どこへ向かってそんなに急いでいらっしゃるのかしら？

2 Tritt her in den Reihen und tanz' mit mir.« (c)

こちらの列に入って私と一緒に踊りましょうよ」

Strophe 4 (第4節) オールフ氏

1 »Ich darf nicht tanzen, nicht tanzen ich mag, (d)

「私は踊ってはいけないし、踊りたくもないのだ

2 Frühmorgen ist mein Hochzeitstag.« (d)

「明日の」早朝は私の結婚式の日なのだ [から]」

Strophe 5 (第5節) ハンノキの王の娘

1 »Hör an, Herr Oluf, tritt tanzen mit mir, (c)

「聞いてくださいな、オールフさま、[こちらへ] 入って私と一緒に踊りましょうよ

2 Zwei güldne Sporne schenk ich dir (c)

私が金の拍車を2本、あなたに贈呈します [から]」

Strophe 6 (第6節) ハンノキの王の娘

1 Ein Hemd von Seide so weiß und fein, (e)

白く繊細な肌着は

2 Meine Mutter bleicht's mit Mondenschein.« (e)

私の母が月の光で漂白したものなのよ」

Strophe 7 (第7節) (= Strophe 4 (第4節)) オールフ氏

1 »Ich darf nicht tanzen, nicht tanzen ich mag, (d)

「私は踊ってはいけないし、踊りたくもないのだ

2 Frühmorgen ist mein Hochzeitstag.« (d)

「明日の」早朝は私の結婚式の日なのだ [から]」

Strophe 8 (第8節) ハンノキの王の娘

1 »Hör an, Herr Oluf, tritt tanzen mit mir, (c)

「聞いてくださいな、オールフさま、[こちらへ] 入って私と一緒に踊りましょうよ

2 Einen Haufen Goldes schenk ich dir.« (c)

金の塊を私はあなたに贈呈します [から]」

Strophe 9 (第9節) オールフ氏

- 1 »Einen Haufen Goldes nähm ich wohl; (f)
「金の塊であれば確かに受け取りたいのだが」
- 2 Doch tanzen ich nicht darf noch soll.« (f)
「しかし私は踊ってはいけないのだし、そうすべきでもない」

Strophe 10 (第10節) ハンノキの王の娘

- 1 »Und willt, Herr Oluf, nicht tanzen mit mir; (c)
「だけど、オールフさま、私と一緒に踊りたくないのならば」
- 2 Soll Seuch und Krankheit folgen dir.« (c)
「疫病と病気があなたについて行くことになるわよ」

Strophe 11 (第11節) 語り

- 1 Sie thät einen Schalg ihm auf sein Herz, (g)
もし彼女が彼の心臓に一撃を加えるならば
- 2 Noch nimmer fühlt er solchen Schmerz. (g)
彼はかつて一度もなかったほどの酷い痛みを感じる [ことになる]

Strophe 12 (第12節) 語り+ハンノキの王の娘

- 1 Sie hob ihn bleichend auf sein Pferd, (h)
彼女は蒼ざめた彼を彼の馬の上に持ち上げた
- 2 »Reit heim nun zu dein'm Fräulein werth.« (h)
「いまからあなたの大切なお嬢さんのところへ馬を駆って帰っておやり」

Strophe 13 (第13節) 語り

- 1 Und als er kam vor Hauses Thür, (i)
そして彼が家の戸の前に着くと
- 2 Seine Mutter zitternd stand dafür. (i)
彼の母親が [息子の様子を見て] 震えながら立っていた

Strophe 14 (第14節) オールフ氏の母

- 1 »Hör an, mein Sohn, sag an mir gleich, (j)
「しっかりお聞き、息子よ、直ぐに私に言ってちょうだい」
- 2 Wie ist dein' Farbe blaß und bleich?« (j)
「どうしてお前の顔色は [そんなに] 血の気もなく蒼白なの？」

Strophe 15 (第15節) オールフ氏

- 1 »Und sollt sie nicht seyn blaß und bleich, (j)
「しかし [顔から] 血の気が引いて蒼白にならざるを得なかったのです」
- 2 Ich traf in Erlenkönigs Reich.« (j)
「私はハンノキの王の王国に出会ってしまったのです」

Strophe 16 (第16節) オールフ氏の母

- 1 »Hör an, mein Sohn, so lieb und traut, (k)
「しっかりお聞き、とても愛しい大切な息子よ
- 2 Was soll ich nun sagen deiner Braut?« (k)
「それでは、私はお前の許嫁に何と言えば良いのです？」

Strophe 17 (第17節) オールフ氏

- 1 »Sagt ihr, ich sey im Wald zur Stund, (l)
「彼女にはこう言ってください、私はいま森の中にいますと
- 2 Zu proben da mein Pferd und Hund.« (l)
「そこで私の馬と犬の訓練をするために」

Strophe 18 (第18節) 語り

- 1 Frühmorgen und als es Tag kaum war, (m)
朝早く、しかしほとんど陽の光も出ていないとき
- 2 Da kam die Braut mit der Hochzeitschaar. (m)
そこに結婚式の大勢 [の客] と一緒に許嫁がやって来た

Strophe 19 (第19節) 語り + オールフ氏の許嫁

- 1 Sie schenkten Meet, sie schenkten Wein, (e)
彼女は蜜酒を注いでは出し、葡萄酒を注いでは出した
- 2 »Wo ist Herr Oluf, der Bräut(i)gam mein?« (e)
「オールフさまはどこなの、私の花婿さんは？」

Strophe 20 (第20節) オールフ氏の母の使い？

- 1 »Herr Oluf, er ritt' in Wald zur Stund, (l)
「オールフさまは、彼はいま森の中へ馬を走らせています
- 2 Er probt allda sein Pferd und Hund.« (l)
「彼はそこで彼の馬と犬の訓練をしているのです」

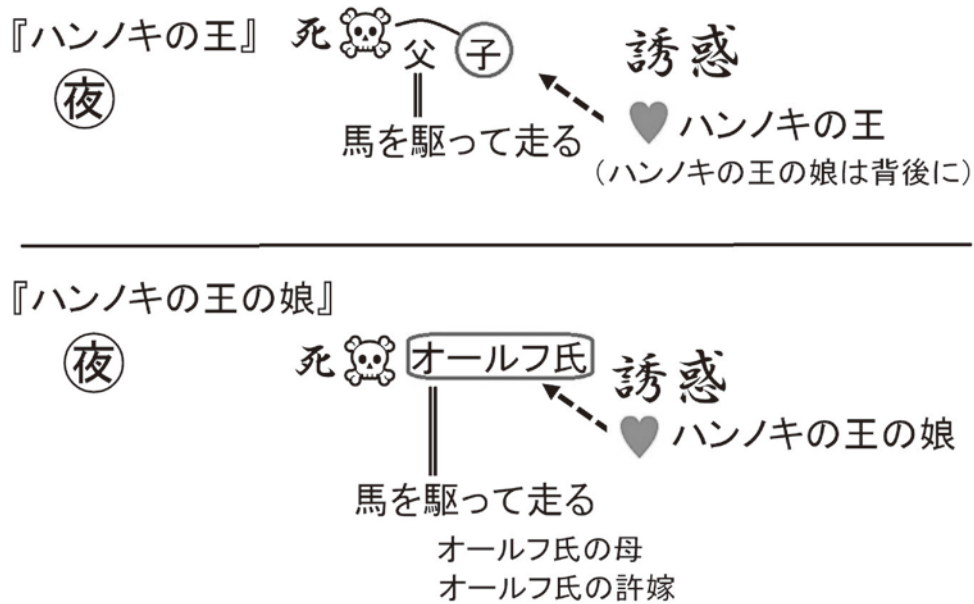
Strophe 21 (第21節) 語り

- 1 Die Braut hob auf den Scharlach roth, (n)
許嫁が深紅色の服地を持ち上げた
- 2 Da lag Herr Oluf und er war todt. (n)
そこにオールフ氏が横たわっていて、彼は死んでいた

3. ゲーテの『ハンノキの王』の含意

3.1 ゲーテの『ハンノキの王』とヘルダーの『ハンノキの王の娘』の比較

ゲーテの『ハンノキの王』と、ヘルダーの『ハンノキの王の娘』の内容が出揃ったところで、改めて、両者の比較・検証を行ってみたい。以下の【図2】も参照して頂きたい。



【図2】『ハンノキの王』と『ハンノキの王の娘』の登場人物と舞台設定

『ハンノキの王』と『ハンノキの王の娘』においては、この世の者ならぬ存在に誘惑され、罪のない者が絶命する筋書きや、夜に馬を駆るというシチュエーションこそ共通している。しかし登場人物の相関関係や、細かい舞台設定に関しては、上記に示した対訳のとおり、それなりの相違が認められる。前者で絶命するのは、名前も明かされない無垢な少年であるが、後者で命を絶たれるのは、「オールフ氏」という名の成人男性である。

ヘルダーの『ハンノキの王の娘』の中で、オールフ氏を誘惑するのは、ハンノキの王の娘であって、ハンノキの王そのものは舞台に登場しない。それに対して、ゲーテの『ハンノキの王』においては、直接的に少年にアプローチを仕掛けてくるのは、ハンノキの王自身である。そしてここでは、ハンノキの王は自分の娘について語りはするが、実際に彼女たちが登場することはない。さらにヘルダーの『ハンノキの王の娘』には、オールフ氏の母親と、彼の許嫁も登場し、氏に訪れる悲劇をいっそう強めることに貢献している。

ゲーテの『ハンノキの王』（延いては歌曲《魔王》）までの成立過程に関しては、やや複雑になってしまった感があるので、【資料1】にその流れを整理しておきたい。

【資料1】ゲーテの『ハンノキの王』（歌曲《魔王》）の成立までの流れ

- ①デンマーク語の譚詩『妖精の一撃』⇒オールフ氏・彼の許嫁・彼の母の全員が死亡
- ②ヘルダーの翻案『ハンノキの王の娘』（1778-1779出版）⇒オールフ氏の死のみ
- ③ゲーテのオペレッタ『漁夫の娘』（1782）に挿入されたバラード⇒少年が死亡
- ④ゲーテの翻案『ハンノキの王』（1782）⇒少年が死亡
- ⑤歌曲《魔王》D328（1815）⇒ゲーテの『ハンノキの王』による⇒少年が死亡

3.2 「少年愛」の視点から見た『ハンノキの王』

『ハンノキの王』の翻案にあたり、ゲーテは「若い女性から未婚男性への誘惑」から、「中年男性による少年への誘惑」へとシチュエーションを変更した。池上・川口が「歴史上その名の知られた王や皇帝たちの多くが少年愛にまつわる逸話をもっている」（2016: 46）と指摘するように、古代ギリシ

アには「成熟した年長者^{エラステス} […] が未成熟な年少者を教育する」(同前: 27) 習慣があった。年少者の教育とは、すなわち「主として少年愛」(同前) を指すもので、しばしば文学や芸術のモチーフになってきた。前述のとおり、ゲーテは「ガニュメート」を詩作化している。この神話は、大神ゼウスが羊飼いの美少年のガニュメート(ガニュメデス)を見初め、鷲に化身して天空へさらって行く物語である⁷⁾。さらには、ゲーテの『東西詩集 West-Östlicher Divan』(1819)の「酌童(酌人)の巻 Saki Nameh」でも、少年と老いた詩人との同性愛が描かれているとの指摘もある⁸⁾(坂田 2003: 51)。とりわけ西洋の芸術家であれば、ギリシア神話に創作の泉を求めることなどは、ごく自然な態度と言えるのだが、海野の「ゲーテも[同性愛者であることを]疑われてはいるが、ゲーテ学者はだれも口に出せない」(2008: 252、[]内は筆者による補足)とする指摘も、看過できないものがある。

木戸が指摘する幾つかの点にも、興味を惹かれる。すなわち、①重病に陥った息子を医者に診てもらいに行ったにも関わらず、馬で帰宅したときには絶命していたという筋書きは、某家にまつわる実話である点(1984: 208)。②当時、ゲーテと懇意にしていたC.vシュタイン夫人(Charlotte Freifrau von Stein)の末子、愛称フィリッツ(Friedrich Gottlob Konstantin von Stein 1772-1844)を、この巨匠はことのほか可愛がっており⁹⁾、『ハンノキの王』を書いた1782年は、ちょうど彼が10歳頃ではないかとする指摘である(同前)。フィリッツが10歳前後の少年であるとすれば、『ハンノキの王』の少年が馬の乗り方も習得していない8~9歳の子供とする、先の三上の言説とも近接する。

4. 結語

ゲーテの『ハンノキの王』において、直接的に子供の命を奪うのは、ハンノキの王である。そのため、彼がもっとも邪悪な存在であることは言うまでもない。しかし馬上の父親は、それを未然に防ぐことができるポジションにいたにも拘らず、子供の主張を無視し続けた。そのあげくに、子供は絶命する羽目となる。その点において、父親も同罪か、親として子供を守るという義務を果たし得なかったという点で、罪はもっと重いかも知れない。フォワードは「『自分は意味がある存在だ』という感覚を子供が持つためには、親から『そうだとも、その通りだよ』というメッセージを与えられ […] なければならない」(2001: 60)と述べているが、この最悪の状況下で無関心を決め込むこと、それも「親の子殺し」の立派な一側面と言えないだろうか。

馬上の父に対して、「自然には怖いものなど存在することは決してないという啓蒙主義的な立場を代弁」(三上 1983: 145)し、子供は「自然の中に働いている不可思議な力に鋭い感受性をもっている」(同前)とする指摘に見られるように、父を権威的な前時代の象徴、子供は新時代を指向する若者の象徴と捉えることも、あながち大きな誤りとはならないであろう。あるいは、絶命する息子は、大人から見れば「ギリシアの愛」の対象であり、そこに古代ギリシアへの懐古趣味を見て取ることもできるかも知れない。

もちろん、それだけのことではあるまい。前述のとおり、ゲーテはフィリッツ少年と親しい間柄にあった。仮に、得体の知れない存在に命を奪われる役に、自分が可愛がっていた少年をモデルに据えたことが事実であれば、ある種の違和感を禁じ得ないものがある。しかしその一方で、「美少年の美は […] あまりに儂く、そのため […] 美少年の美を永遠に保ちたいと願えば、死とひきかえにのみ永遠性が得られる」(池上・川口 2016: 75)とする美学から見れば、少年を愛するが余りの行動と理解できなくもない。

いずれも憶測の域を出るものではないが、上記のさまざまな要因が総合的に咀嚼された結果、ゲーテのイメージは、自身の創作の劇的効果をさらに強めるために、「中年男性から少年への誘惑」すな

わち「少年愛のモチーフ」を、『ハンノキの王』に導入したとする見解を以て、まずは本稿の結論としておきたい。このゲーテのデフォルメは、純粋に芸術的観点に立つものなのか、それとも同性愛的な含意によるものなのか。あとは推測する他なさそうだが、こうして生み出された『ハンノキの王』は、シューベルトのみならず、多くの作曲家の創作意欲を刺激してきたことは間違いがない¹⁰⁾。たとえば、K. チェルニー (Karl Czerny 1791-1857) の《魔王》(1811)、C.G. レーヴェ (Carl Gottfried Loewe 1796-1869) の《魔王》Op.1-3 (1817 od.1818)、L. シュポア (Louis Spohr 1784-1859) の《魔王》Op.154-4 (1856) などが良く知られるところであろう。L.v. ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven 1770-1827) の未完のスケッチ (ca 1789) を、R. ベッカー (Reihold Becker) が補筆完成させた《魔王》WoO 131 も魅力的な作品である。H. ベルリオーズ (Hector Berlioz 1803-69) の手による管弦楽版 (1860) や、F. リスト (Franz Liszt 1811-1886) の管弦楽版 (1860) も見逃さないであろう¹¹⁾。その意味で『ハンノキの王』は、歌詞として立ち振る舞う機会の方が、むしろ多いと言えるかも知れない。

それでは、シューベルトは『ハンノキの王』に対し、どのような方法論を以て、誰もが「傑作」と認める作品にまで仕立て上げたのであろうか。本研究が最終的に目指すところは、まさにこの点にある。本来であれば、ここから歌曲《魔王》の楽曲分析を展開し、上記の考察に照らし合わせながら、文学と音楽の両面から理解を掘り下げたいところである。しかし、限られた紙面ではそれも叶わない。《魔王》の音楽内容に関する考察は、機会を改めて詳らかにしてみたい。

注

- 1) ドイツ語として定着している“Volkslied”という言葉は、ヘルダーに由来する (嶋田 2018: 763)。
- 2) 栗花落(つゆ)による翻訳 (2012) は、『漁師の娘』を理解する上で貴重な資料となる。漁師の娘ドルトヒェンが、漁師小屋 (ハンノキの下にある) で父の帰りを待ちながら歌われる挿入歌の一つが、『ハンノキの王』である。『漁師の娘』には、この他にも幾つかの歌が挿入されている。
- 3) 物語は過去形での記述が一般的と言えるが、『ハンノキの王』の語り手は、「ドキュメンタリーの解説をするレポーターのような役をはたします。自分もこれから何が起こるのか分かっていないながら、とにかく現場からの様子を同時進行的に伝えるのです」(三上 1983: 122) という指摘も興味深い。
- 4) “Elf” は、ゲルマン神話に出て来る小妖精である。“Elf” の訳語としては、「妖精」が一般的である。三上は「精霊は、人間界と天界の間ではなく、人と自然の中間世界の住人とみられていて、人間でないことはもちろん、自然に存在しても動物とはまったく別なものです。このような精霊は、ドイツ語で《Elfen》という概念でまとめられています」(1983: 143-44) という興味深い見解を述べている。
- 5) 『ハンノキの王』の2年前に書かれた『妖精の歌』(1780) においても、ゲーテは“Auf Wiesen an den Erlen / Wir suchen unsern Raum”「草原のハンノキのそばに、私たちは居場所を求めるとい表現を用いている (木戸 1884: 214)。
- 6) クロノスは、ローマ神話では「サトゥルヌス」(Saturnus) と呼ばれる。クロノス(サトゥルヌス)の物語は、たとえばF.de ゴヤ (Francisco de Goya 1746-1828) の『我が子を食らうサトゥルヌス Saturno devorando a un hijo』(1820-ca 1824) や、P.P. ルーベンス (Peter Paul Rubens 1577-1640) の『我が子を食らうサトゥルヌス Saturno devorando a un hijo』(1636-ca 1638) などの絵画にも、強烈なインパクトとともに描き出されている。
- 7) ガニユメート (ガニユメデス) に関しては、レンブラント (Rembrandt Harmensz van Rijn 1606-1669) の『ガニユメートの略奪 Raub des Ganymed』(1635) など、古くから、画家たちの創作意欲を刺激してきた魅惑のモチーフと言える。

- 8) 『東西詩集』の「酌童(酌人)の巻」には、「私が主人に感謝の酌をする、そのとき彼は私の額にキスをしてくれる」(Goethe 2007: 606、拙訳)という艶めかしい表現が見られる。
- 9) さらに万足は、ゲーテはフィリッツを連れて、ブロッケン山に登るエピソードにも触れている(1975: 95)。ブロッケン山と言えば、ゲーテの『ワルプルギスの夜の起り Die erste Walpurgisnacht』(1799)や、延いては『ファウスト Faust』第1部(1808年刊行)の「ワルプルギスの夜 Walpurgisnacht」や、「ワルプルギスの夜の夢 Walpurgisnachtstraum」などが彷彿させられ、興味深いものがある。
- 10) 『ハンノキの王』と『ハンノキの王の娘』の両方を併せれば、相当数の作品が書かれている(ただし多数派は前者である)。古い文献ではあるが、デューリング(Düring)が作成した一覧には131曲もの《魔王》がリスト・アップされている(1972: 115-140)。インターネット上では、近年に書かれた《魔王》のデータも確認できることから(The Lieder Net. <https://www.lieder.net/lieder/>. Accessed Dec.13. 2019.)、なおもこのテキストは、作曲家の心を揺さぶる源泉であり続けていることを、十分に伺い知ることができる。
- 11) リストによるピアノ編曲版《フランツ・シューベルトの12の歌曲 12 Lieder von Franz Schubert》S.558における《魔王》も、魅力的な作品である。M. レーガー(Max Reger 1873-1916)の管弦楽版もある。

参考文献

- [1] Düring, Werner-Joachim. 1977. *Erlkönig-Vertonungen: Eine historische und systematische Untersuchung: Notenteil*. Regensburg: Gustav Bosse Verlag.
- [2] Düring, Werner-Joachim. 1972. *Erlkönig-Vertonungen: Eine historische und systematische Untersuchung*. Regensburg: Gustav Bosse Verlag.
- [3] フォワード、スーザン 2001 『毒になる親——生苦しむ子供——』 玉置悟訳 講談社。(原書: Susan Forward *Toxic Parents*.1989.)
- [4] Goethe, Johann Wolfgang. 2007. *Sämtliche Gedichte*. Frankfurt am Mein; Leipzig: Insel. Reprint, Berlin: Deutschen Klassiker Verlages, 1815-28.
- [5] Goethe, Johann Wolfgang. 1965. *Goethe Poetische Werke*. Bd. 1: *Gedichte und Singspiele*. Berlin; Weimar: Aufbau Verlag.
- [6] ゲーテ、ヨハン・ヴォルフガング 2003 『新装普及版 ゲーテ全集1 詩集』 山口四郎他訳 潮出版社。
- [7] ゲーテ、ヨハン・ヴォルフガング 1962 『東西詩集』 小松健夫訳 岩波書店。
- [8] ゲーテ、ヨハン・ヴォルフガング 1960 『ゲーテ全集 第1巻』 片山敏彦他訳 人文書院。
- [9] ヘルダー、ヨハン・ゴットフリート 2018 『ヘルダー民謡集』 嶋田洋一郎訳 九州大学出版会。
- [10] Herder, Johann Gottfried. 2013. *Volkslieder: Stimmen der Völker in Liedern*. Berlin: Holzinger. Reprint, Stuttgart: Reclam, 1975.
- [11] ヘシオドス 1984 『神統記』 廣川洋一訳 岩波書店。
- [12] ホメロス 1992 『イリアス』 下 松平千秋訳 岩波書店。
- [13] 池上英洋、川口清香 2016 『美少年美術史—禁じられた欲望の歴史—』 筑摩書房。
- [14] 木戸芳子 1984 「『魔王』(Erlkönig) 覚書」 『東京音楽大学 研究紀要』 第9号: 205-224頁。
- [15] 前田昭雄 2004 『フランツ・シューベルト』 春秋社。
- [16] 万足卓 1975 「ゲーテのバラード—その魅惑の秘密—」 『金沢大学法文学部論集 文学編』 第23号: 83-118頁。
- [17] 三上かりん 1983 「魔王の世界—ドイツ・リートにおける不思議な登場人物達—」 『音楽研究: 国立音楽大学大学院研究年報』 第5号: 88-150頁。

- [18] 大山聡 1990 「ヘルダー」『増補改訂 新潮世界文学辞典』 新潮社 997-998頁。
- [19] 栗花落和彦 2012 「翻訳 ゲーテの歌唱劇『漁師の娘』」『島大言語文化：島根大学法文学部紀要 言語文化学科編』第33号（10月）：129-156頁。
- [20] 手塚富雄 1990 「ゲーテ」『増補改訂 新潮世界文学辞典』 新潮社 344-348頁。
- [21] 富重与志生 2003 「啓蒙の夢の時代—1701年から1789年まで—」『はじめて学ぶドイツ文学史』 柴田翔編著 ミネルヴァ書房 69-103頁。
- [22] 坂田正治 2003 「ゲーテの少年愛」『熊本大学社会文化研究』第1号：51-73頁。
- [23] Schubert, Franz. 2005. *Lieder*. Bd. 1: *Hohe Stimme*. Kassel; New York: Bärenreiter.
- [24] Schubert, Franz. 1970. *Lieder*. Bd. 1 Teil a/b, *Neue Ausgabe sämtlicher Werke*. Kassel usw: Bärenreiter.
- [25] 菅原邦城他訳 1976 『デンマーク文学作品集』 牧野不二雄監修 東海大学出版会。
- [26] フリース、アト・ド 1984 『イメージ・シンボル辞典』 山下主一郎他訳 大修館書店。（原書：Ad de Vries. *Dictionary of Symbols and Imagery*. North-Holland : Publishing Company.）
- [27] 海野弘 2008 『ホモセクシャルの世界史』 文藝春秋。